

第一次大極殿院復原原案研究の状況について

第一次大極殿院復原の根拠となる資料

	検出遺構からわかること		類型調査（復原案の参考となる可能性のある材料を網羅的に収集）				今後の検討事項
			文献資料	発掘遺構	現存遺構	絵画資料	
南門	<p>平面規模：礎石建(掘立柱痕跡はなし、柱位置は不明)</p> <p>基壇規模：東西28.4m(96尺) 南北16.3m(55尺)</p> <p>階段：南北に1基ずつ上・中・(下)層の階段確認。</p> <p>(南面下層) 巾13.7m、出1.1m。 耳石心心距離13.3m(45尺)。 (地覆石の巾は北面上層の外装抜取痕跡から40cmと推定)</p> <p>(北面上層) 巾15.7m、出85～110cm 掘込地業：東西31.2m、南北17.4m</p>	<p>・『続日本紀』に「重閣門」の記述あり (和銅3(710) <i>重閣門に出御し、宴を文武百官と華人・蝦夷に賜い、諸方の榮を奏す。)</i>) →藤原宮大極殿院南門と考えられる</p> <p>〈神龜1(724) <i>重閣中門に出御し獵騎を見る。)</i>〉</p> <p>→大極殿院南門に関する確実な史料は、天平12年(740)の天皇が出御して大射を見たという記事(『続日本紀』)のみ。南門の規模や構造はわからない。一方、「重閣門」と明記する史料で大極殿院南門の可能性があるものがいくつかあるが、藤原宮であったり、朝堂院南門や朱雀門を指す可能性を否定できず、南門が重層か単層かを定める決定的な史料にはならない。</p>	<p>視点</p> <ul style="list-style-type: none"> 平城宮全体の門の利用法や形態(単層か重層か)など 資財帳等に見える門の規模、単層・重層。何間何戸か。寺院等を対象にした文献に見える門の利用法など。 <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> 史料は基本的に『大極殿関係史料(稿)(一)儀式書編』、『大極殿関係史料(稿)(二)編年史料』より (『日本書紀』、『続日本紀』、『扶桑略記』など) 奈良時代の資財帳 (『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』、『西大寺資財流記帳』) 平安時代の寺院縁起 (『興福寺流記』、『薬師寺縁起』など) 中国の宮殿に関する史料(『旧唐書』、『隋書』など) 韓国の宮殿に関する史料で、古代の参考になるものはない 	<p>視点</p> <p>平面規模・遺構からわかる仕様(石材・木材等)などの傾向</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> 古代宮都の門遺構 (前期難波宮内裏南門・朝堂院南門・朱雀門、大津宮内裏南門、藤原宮大極殿院南門・朝堂院南門・朱雀門、平城宮朱雀門・朝堂院南門・第二次大極殿院南門、恭仁宮朝集殿院南門、後期難波宮朝堂院南門・大極殿院南門、長岡宮大極殿院南門・朝堂院南門など) 古代寺院の南大門・中門等の遺構 (興福寺南大門・中門、大安寺南大門・中門、薬師寺南大門・中門、東大寺南大門・中門、飛鳥寺南大門・中門、川原寺南大門・東門、本薬師寺中門、大官大寺南大門・中門、山田寺南門・中門など) 古代官衙の遺構 (大宰府政庁南門、胆沢城政庁南門、志波城外郭南門など) 中国・韓国の大極殿院相当遺構(高句麗・新羅・渤海・高麗) 	<p>視点</p> <p>基礎資料として近世までの単層門・二重門を網羅的に収集。柱間と上部構造の関係(特に二重か否か)を分析。修理工事報告書等から図面の集成、重要な事例は現地調査をおこなう。</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> 平安中期以前の国宝・重要文化財建物 (法隆寺金堂・中門・東大門、東大寺転害門など) 近世以前の国宝・重要文化財単層・二重門建物 (法隆寺中門、東大寺南大門、東福寺三門、大徳寺山門、妙心寺山門、南禅寺三門、根来寺大門など) ・梁間3間の門遺構 (岩木山神社楼門、増上寺三門など) ・中国・韓国の文化財建物 	<p>視点</p> <p>古代～中世における門の構造形式や使われ方の検討</p> <p>対象 (東西楼・築地回廊・区画内部も同じ)</p> <p>『年中行事絵巻』、『伴大納言絵詞』、『信貴山縁起』、ほか『日本の絵巻』、『続日本の絵巻』(中央公論社)、『聖徳太子絵伝』(奈良国立博物館)、『絵因果経』(角川書店)所収のすべての絵巻物</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平面形式と規模 基壇高さの確定 単層か重層か、梁間2間か3間かなど上部構造の検討
東西楼	<p>平面規模：桁行5間×梁間3間。柱間寸法：桁行15.5尺等間、梁行13尺等間。総柱。側廻り掘立柱一部礎石建、内部礎石建。</p> <p>基壇 基壇土、基壇外装抜取溝を検出。 東楼：東西約92.4尺(中層礫敷の端部) 西楼：東西約93尺(基壇外装抜取溝外側) 東西楼で基壇規模、出が異なる。</p> <p>出土遺物：東楼掘立柱柱穴から径約75cmの柱根・雛形が出土。西楼掘立柱柱穴から礎石2基出土(回廊もしくは西楼所用)。</p> <p>階段：基壇外側には取付かない。</p>	<p>・『続日本紀』に「南楼」の記述あり (天平8(736) <i>天皇、群臣を南楼に宴する。)</i>) →南楼は第一次大極殿院南面の東西楼の総称と考えられる。また上層に上がったと考えられる。</p>	<p>視点</p> <p>楼の形態、上層を使用する建物とその使用法など</p> <p>資財帳等に見える楼の形態、使用法など</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> 六国史にみえる9世紀以降の楼関係史料(『続日本紀』、『類聚国史』、『日本略記』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本三代実録』、『日本三代実録』) ・奈良時代の資財帳(『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』、『東院縁起資財帳』、『西大寺資財流記帳』) ・中国の宮殿に関する史料(『旧唐書』、『隋書』など) ・『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に「経楼」、「鐘楼」の記述あり ・平安宮応天門の東西楼と大極殿の東西楼には階段が常設されていた可能性あり 	<p>視点</p> <p>平面規模・遺構からわかる仕様(石材・木材等)などの傾向</p> <p>対象</p> <p>古代宮都・国府・城柵・国分寺の範囲で奈文研地方官衙関係遺跡データベースをもとに「楼」「櫓」と記載されている遺跡を抽出。回廊の取付く総柱建物遺構。</p>	<p>視点</p> <p>古代の建物、楼造建物の構造形式・各部のおさまりの傾向。修理工事報告書等から図面の集成、重要な事例は現地調査をおこなう。</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> 古代～近世以前の国宝・重要文化財楼造建物 (法隆寺経蔵・鐘楼、大野神社楼門、唐招提寺鼓楼、円鏡寺楼門、手手寺二王門、法隆寺東院鐘楼、鏝阿寺鐘楼、石山寺鐘楼、金剛寺楼門など) ・中国・韓国の文化財建物 (景福宮慶会楼、独楽寺観音閣など) <p>現地調査：岩木山神社楼門、長勝寺山門、甲斐善光寺山門、慈眼寺鐘楼門、独楽寺観音閣</p>	<p>視点</p> <p>古代～中世における上層利用建物・楼造建物とその構造、使われ方の検討。門と回廊の取付き。</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『吉備大臣入唐絵巻』、ほか『日本の絵巻』・『続日本の絵巻』(中央公論社)、『聖徳太子絵伝』(奈良国立博物館)、『絵因果経』(角川書店)所収のすべての絵巻物 ・敦煌壁画(『敦煌建築研究』) 	<ul style="list-style-type: none"> 基壇高さの確定 ・通柱か管柱か、上層に柱をたてるか、振隅など上部構造の検討
築地回廊(穴門・脇門含む)	<p>柱間寸法：側柱間梁間7.08m(24尺)、桁行4.58m(15.5尺)。</p> <p>南面回廊：基壇土、基壇外装抜取溝、側柱礎石痕跡、雨落溝を検出。</p> <p>東面回廊：ほとんど検出されず。一部基壇土、基壇外装抜取溝、側柱礎石痕跡、雨落溝、築地基底部を検出。門(柱間12尺)を開く。</p> <p>西面回廊：ほとんど検出されず。一部基壇土、基壇外装抜取溝、雨落溝、側柱礎石痕跡(南端2基のみ)検出。</p> <p>北面回廊：南雨落溝のみ検出。門は検出せず。回廊全体の南北約1080尺、東西約600尺。西面規模：回廊にゆがみあり。</p>	<p>・第一次大極殿院の築地回廊(歩廊)を恭仁宮に移築したことが知られ(東西両面のみとみられる)、発掘調査による恭仁宮大極殿院の規模でも整合するが、平城宮大極殿院の回廊の構造や規模に関する史料はない。</p>	<p>視点</p> <p>文献から判明する宮殿・官衙・寺院の穴門・脇門の位置や構造、使用法について</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・史料は主に『大極殿関係史料(稿)(一)儀式書編』より(『延喜式』、『政事要略』、『内裏儀式』、『内裏式』、など) →複廊外側は待機場所・食事場所。内側は儀式空間。 ・平安宮八省院の儀式史料からの溯及的検討。 →東西面に開く門は、『内裏儀式』からは1つ以上あるが位置や規模は不明。 ・中国の宮殿に関する史料(『旧唐書』、『隋書』など) →隋唐の大極殿院相当施設には回廊の東西辺に門が開く 	<p>視点</p> <p>平面規模・遺構からわかる仕様(石材・木材等)などの傾向</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古代宮都の回廊遺構 (前期難波宮朝堂院・内裏回廊、恭仁宮大極殿院回廊、平城宮内裏回廊、長岡宮第二次内裏回廊など) ・飛鳥・奈良時代の寺院遺構 ・穴門・脇門に関しては、奈文研研究報告『官衙と門』資料編掲載図面・一覧表より抽出 <p>現地調査：京都御所・平安神宮</p>	<p>視点</p> <p>古代の建物、回廊の構造形式・各部のおさまりの傾向。修理工事報告書等から図面の集成、重要な事例は現地調査をおこなう。</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宮殿遺構(京都御所、平安宮など) ・近世までの回廊遺構 (法隆寺西院回廊・東院回廊、油日神社回廊、春日大社回廊、巖島神社回廊、石清水八幡宮回廊など) <p>現地調査：京都御所・平安神宮</p>	<p>視点</p> <p>古代～中世における穴門・脇門の位置や構造、使われ方などの検討。門と回廊の取付き。</p> <p>対象</p> <p>『年中行事絵巻』、ほか『日本の絵巻』・『続日本の絵巻』(中央公論社)、『聖徳太子絵伝』(奈良国立博物館)、『絵因果経』(角川書店)所収のすべての絵巻物</p>	<ul style="list-style-type: none"> 基壇高さの確定 ・東面、西面回廊の柱の割付 ・脇門、穴門の有無、位置の確定 (平安の儀式、鬼瓦の分布等から検討) ・東面、西面、北面回廊の基壇高さ ・築地基底巾の確定 ・寄柱をみせるか否かなど上部構造の検討
区画内部	<p>壇上礫敷：径4～8cmの礫敷</p> <p>内庭礫敷：下層礫敷(径5～10cmの礫)、南面回廊周辺のみその上に中層礫敷(径2～5cm)がのる。</p> <p>南北溝：内庭北方で検出。内庭中央通路の東側溝と考ええると、通路幅は約125尺。</p> <p>東西溝：南面築地回廊北端から北16mに位置する。内庭の排水を担う。</p> <p>磚積擁壁：残りの良いところで7段分を検出、傾斜あり。高さは上部削平により不明。磚出土、最上部のおさまりは不明。</p> <p>斜路：東西斜路を検出。土壇との高低差をスロープ状につなぐ。巾16m程度、南北長さ16.6m以上。</p>	<p>→奈良時代の直接的な史料はないが、儀式において五位以上の貴族(150～200人程度)が列立する場だったとみられる。</p>	<p>視点</p> <p>南北通路・東西通路・広場の使い方や必要性</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・史料は基本的に『大極殿関係史料(稿)(一)儀式書編』、『大極殿関係史料(稿)(二)編年史料』より ・中国の宮殿に関する史料(『旧唐書』、『隋書』など) →隋唐の大極殿院相当施設には井戸がある 	<p>視点</p> <p>南北通路・東西通路の有無、広場舗設の仕様等</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古代宮都の内庭部の様相 (前期難波宮、大津宮、藤原宮、恭仁宮、後期難波宮、長岡宮、平安宮など) 	<p>視点</p> <p>古代の建物、回廊の構造形式・各部のおさまりの傾向。修理工事報告書等から図面の集成、重要な事例は現地調査をおこなう。</p> <p>対象</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の宮殿遺構 (京都御所、平安神宮、首里城など) ・中国・韓国などの宮殿遺構 (故宮、瀋陽故宮、景福宮、昌慶宮、昌徳宮、徳寿宮、慶熙宮、フエ王宮など) <p>現地調査：京都御所・平安神宮・故宮</p>	<p>視点</p> <p>南北通路・東西通路・広場の使われ方や必要性の検討</p> <p>対象</p> <p>『年中行事絵巻』、ほか『日本の絵巻』・『続日本の絵巻』(中央公論社)、『聖徳太子絵伝』(奈良国立博物館)、『絵因果経』(角川書店)所収のすべての絵巻物</p>	<ul style="list-style-type: none"> 地区全体の地形復元 ・磚積擁壁高さの確定 ・斜路の勾配の確定 ・壇上の高欄の有無、仕様等 ・井戸の有無、仕様等 ・幢竿の有無、仕様等 ・宮殿遺構等の類型調査